

## ロシア語は面白いぞ！ Интересно изучать русский язык！

### ロシア語への招待

この小文は、新しい外国語を履修するさいに生ずる迷いやためらいをやんわりと解消し、ロシア語、ロシア人、ロシアという国を少しでも多く知ってもらう目的で作られました。そして、ロシアについて考えるヒントを少しばかり提供しようということでもあります。

## 「花のワルツ」と「おそロシア」

ロシアという国は、私たちにとって心理的に非常に遠い国のようです。地理的には北海道の北の端である宗谷岬から、晴れた日であれば肉眼でサハリン島を見ることができます。にもかかわらず東京とモスクワの距離は、物理的にも心理的にも遠いままであるように思います。

ロシアの基本的イメージというと、「寒い」、「暗い」、「怖い」の3語にまとめられるのではないかと想像します。特に「怖い」について、最近「おそロシア」ということばまであるようで、思わず苦笑させられてしまいます。これらの否定的なイメージは、ある意味では間違っていないでしょう。しかし、残念なことは、何らかの肯定的なイメージも、ことロシアに関しては否定的な3つのキーワードがすぐに覆い隠してしまうことです。ロシアには文学、音楽、絵画、バレエなどのすばらしい伝統があるにもかかわらず、「寒い」、「暗い」、「怖い」が、ロシア全体のイメージとして前面に出てきてしまうようです。チャイコフスキーが作曲した「くるみ割り人形」の中の「花のワルツ」は、題名は知らなくても聞けば多くの人が知っている曲であると思います。それはとても暖かい雰囲気メロディーです。この曲が「寒く」



ピョートル・チャイコフスキー



冷蔵庫などに貼るマグネット（上から時計回りで、プーシキン、ゴーゴリ、ドストエフスキー、トルストイ、チャーホフ）

て「暗く」て「怖い」ロシアの大地から生まれたということは紛れもない事実でありながら、このことは忘れさられて、残るのは3つのキーワードのみということになるようです。また日本ではドストエフスキーとトルストイがロシア文学の代表であるとみなされているようです。確かにこの2人は重厚長大で、ロシアのイメージそのものかもしれません。しかし、この2人以外にもロシアには多くの作家がおり、玲瓏なプーシキン、「世にも奇妙な物語」が大好きなゴーゴリ、「山椒は小粒でもぴりりと辛い」を具現するようなチャーホフなどバラエティーに富んでいます。日本では有名ではないとある作家の作品など文章そのものが美しく、読んでいとうっとりとしてしまうほどです。それなのにロシアはす

ぐに「暗い」となってしまいます。これらのイメージは、一方ではロシアが本来持っている特質が原因であり、他方では日露関係の歴史に理由があるように思われるのですが、その話はここでは割愛します。重要なことは、否定的側面と肯定的側面を公平に見て、それらをきちんと一つにまとめることだと考えます。

## 日本とロシア

現在、国際情勢は大きく動いています。国際情勢というよりも、国際力学と言った方がよいかもしれません。中国の膨張とアメリカの相対的な衰退という状況を考慮するとき、日本は北方の隣人であるロシアとの関係を良好にしておかなければならないのは自明の理です。にもかかわらず現在の日本におけるロシアに対する関心は非常に心許ない状況であると言えます。私たちはロシアのことをあまりにも知らず、また関係が発展し得ることにも気づいていません。日本とロシアが国の規模という点でとてもよく似ていることをどれくらいの人知っているのでしょうか。例えば人口です。ロシアはあれほど広大な土地を有しているながら、人口は日本と比べてちょっと多いだけで（日本：約1億2700万人、ロシア：約1億4300万人）、それぞれの首都を比べても、その規模はよく似ています（東京23区＝戦前の東京市：約900万人、モスクワ市：1200万人）。また、それぞれの国が持っているものは、一方が進んだ工業技術であり、他方は天然資源です。これは両者が協力すれば互いに足りないものを補い合える関係にあるわけです。このように、世界地図上で占める面積が全く違うにもかかわらず、日本とロシアは対等な立場で付き合っていける可能性を秘めています。

## 語学としてのロシア語

ロシア語は、文法が複雑、やたら格変化が多くて、なにしろ世界でいちばん難解な言語である。これは昔から言われることですが真っ赤なうそです。これはロシア語をマスターした人の自慢話であり、ロシア語で挫折した人の言い訳でしょう。外国語を学ぶときに、この言語は難しくあの言語は簡単だなどという難易の別は本質的にありません。

ロシア語は、英語やフランス語、ドイツ語、イタリア語、スペイン語などと同じインド・ヨーロッパ語系に分類されます。でも、いま挙げた言語がどれもラテン文字で綴られているのに対して、ロシア語だけはキリル文字（ギリシア文字が元になっている）です。たとえば、「Я」「Д」「Ж」「Ш」「И」「Ю」「Ф」といった、あまり見慣れない形をしています。

この言語の特徴を二、三挙げておきましょう。ロシア語は一文一音の世界で、たとえば「Я」という文字は「ヤー」としか発音しません。すべて一つの文字に一つの音しかないので、憶えてしまえば、それでオーケーです。しかも、見慣れないそれらの文字もいま挙げた程度の数しかありません。文法規則（語尾変化）は明学で授業にまじめに出席している学生は例外なくマスターしています。一方、他のインド・ヨーロッパ語に見られるあの、煩



チェブラーシカのマトリョーシカ

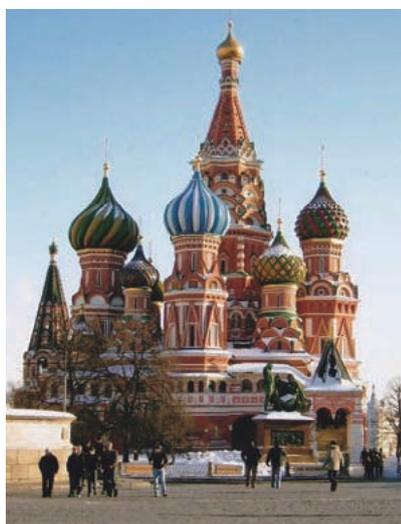
わしい「冠詞」——英語ならば、「the」や「a」——がまったく存在せず、これは他のヨーロッパの言語の教師や学習者から羨ましがられる点です。それと、「語順が生命」といってもいい英語と違って、何か話をしようとするとき、まず最初に頭に浮かんだ単語からぼつりぼつり繰り出していけば、伝えたいことは完全に正しく伝わります。語順というものにさほど神経を尖らす必要がないからです。

## ユーラシア

ヨーロッパの文化は、キリスト教というものと深い関係があります。地中海世界で覇を競ったギリシアやローマ——そのローマ帝国はキリスト教を国教と定めますが、やがて東西に——西ローマ(ラテン世界)と東ローマ(ギリシア・ビザンチン文化)に分裂します。同じキリスト教でもその後、これら二つの文化は、時とともに、文化的にも歴史・環境的にも大きな変化を遂げることになります。

ロシア文化の源流を探っていけば、後者の東ローマ帝国(都はコンスタンチノーブル、現在のトルコ共和国・イスタンブール)の文化や宗教と深くかかわっていることが

わかります。大ざっぱに言うと、ヨーロッパの西の文化はおおむねひとつに括られますが、東方のそれは、東ローマ帝国がオスマントルコに滅ぼされるころ(1453年)には、ずっと北方のスラヴ民族のあいだに浸透していて、なかでもさらに北に位置するロシアが(遅ればせながら)世界史の片隅に顔を覗かせ始めます。要するに、広くヨーロッパ大陸という言い方をすれば、西の半島と言ってもいい国々は古くから着実な発展を遂げ、内陸深く食い込んだ東の、より広大な地域は、それなりの歴史的時間を刻んでいたのです。東西ヨーロッパという分け方がそれです。もっとも、冷戦の壁が崩れた現在では、東欧は中欧(中央ヨーロッパ)という言い方をするようになりましたが……。



聖ワシーリー寺院



コロームenskoye (モスクワ)

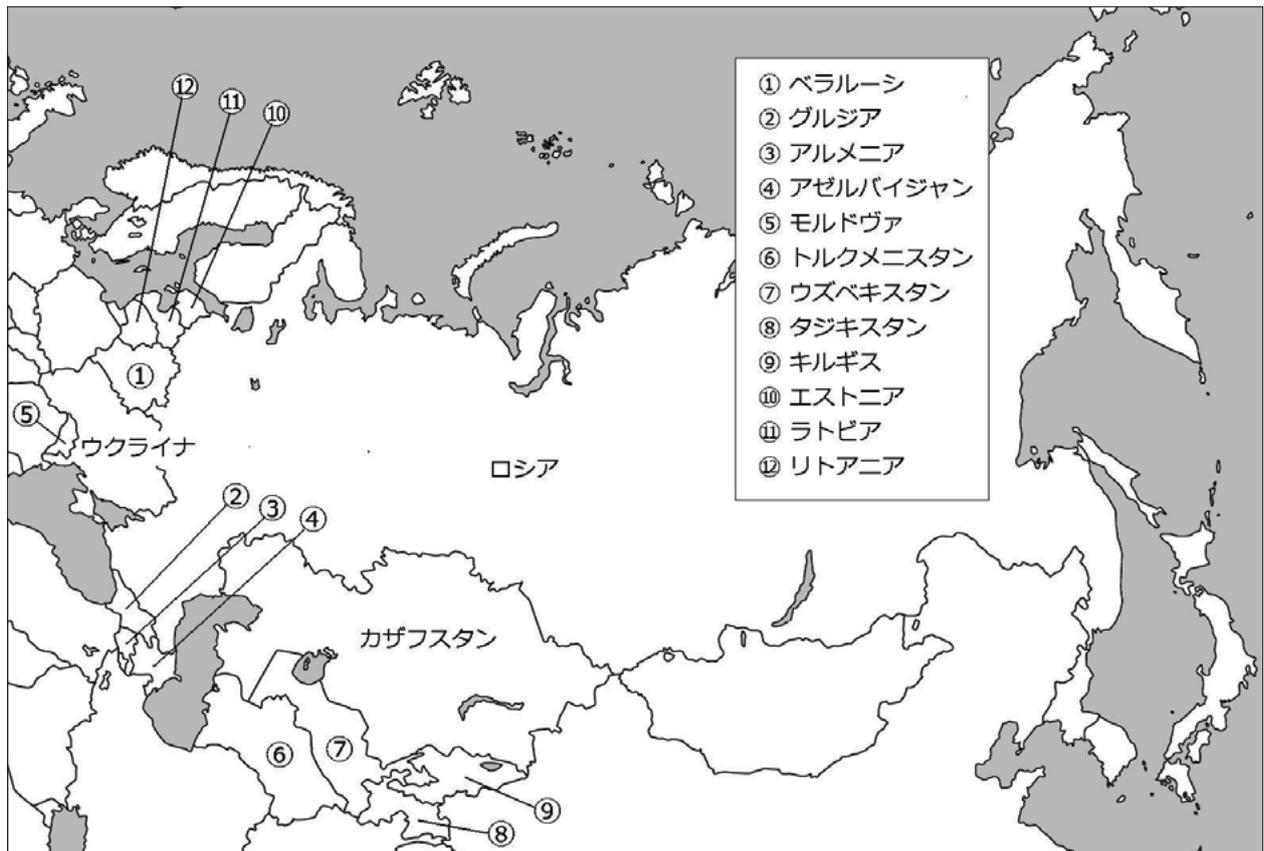
一方でロシアはアジアからの影響も強く受けています。私たちの国は元寇を退けることに成功しましたが、ロシアはそれが叶わず、モンゴルの4ハン国のうちの一つであるキプチャク・ハン国に支配されていました。この支配は「タタールのくびき」と呼ばれ、約250年間続きました。その間にロシアには、肉体的にも精神的にも、アジアの血が混ざったのです。またモンゴルから解放された後、ロシアはシベリアを東へ東へと開拓し、そこに住むアジア系の住民を自国の中へ取り込んで行くわけです。ちなみに世界初の有人宇宙船の名はボストーク1号ですが、ボストークとはロシア語で「東」という意味です。アメリカが西へ西へと辺境を開拓していったのと同様に、ロシアは東へ進んだわけで、東の海へ至った後、ロシア人にとって次のフロンティアの一つが宇宙だったわけです。

このようにロシアは、一方で東ローマ(ギリシア・ビザンチン文化)の影響を受けていると同時に、他方でアジアの血が深いところに流れています。それでロシア人は数百年にわたってずっと(今なお)、自分たちが一体ヨーロッパなのかアジアなのかと自問し続けています。ヨーロッパとアジアを併せて「ユーラシア」と言いますが、ロシア人こそユーラシア人なのだと自覚すればずっとわかりやすくなるのにと、思っているロシア人もいます。



スターバックスのタンブラー

ロシアの歴史や文化については、それぞれ授業で詳しく知ることができるでしょう。偏見まじりで見られても仕方がないものが、多々あることは否めません。内外の政治(体制や国際関係、民族問題をすべて含めて)がどうしても大きな意味を有しており、クローズアップされざるを得ないからです。天気の良い日には肉眼でも見ることのできる唯一の隣国であるにもかかわらず、そうなのです。



ロシア語が使われている旧ソ連諸国

英語はインターナショナルな共通語としての地位を確立していますが、ロシア語を日常語としている民族がユーラシア大陸には非常に多いのです。「言語が一つになれば世界は平和になる」というのは、残念ながら、神話の一種にすぎないでしょう。それでもユーラシアは地球最大の大陸であり、その広大な地域で使われているロシア語をちょっとばかりかじることから始めるのも、悪くないと思います。

以下にロシアの歴史・文化・芸術、現代ロシアの政治・経済、日ロ交流史などについて、またロシア語圏である中央アジアについて、理解を深めるための本を紹介します。

- ロシア史（新版世界各国史22） 和田春樹 山川出版社 2002年  
 現代ロシアを知る55章 下斗米伸夫・島田博（編著） 明石書店 2003年  
 現代ロシア政治入門 横手慎二 慶應義塾大学出版会 2005年  
 ロシア人しか知らない本当のロシア 井本沙織 日経プレミアムシリーズ 日本経済新聞出版社 2008年  
 新版ロシア文学案内 藤沼貴・安岡春子、小野理子 岩波文庫 2000年  
 ドラマチック・ロシアin Japan 文化と史跡の探訪 ロシア文化フェスティバルIN JAPAN日本組織委員会・長塚英雄編 (株)生活ジャーナル 2010年  
 ユーラシア・ブックレット（東洋書店）  
 No.31 「黒い瞳」から「百万本のバラ」まで—ロシア愛唱歌集— 山之内重美 2002年  
 No.36 ロシア演劇の魅力—ワンダーランド・ロシアは演劇の国— 堀江新二・N.スタロセリスカヤ・松川直子 2002年  
 No.47 ロシア・オペラ—名作20選— キーロフ・オペラ友の会 2003年  
 No.65 ロシアに渡った日本人—江戸・明治・大正・昭和— セルゲイ・クズネツォフ著 訳・荒井雅子 2004年  
 No.67 ロシア・アニメ—アヴァンギャルドからノルシュテインまで— 井上徹 2005年  
 No.92 チャイコフスキー 宮澤淳一 2006年  
 No.100 ポリショイサーカス 大島幹雄 2006年  
 No.122 シルクロードを行く—中央アジア五ヵ国探訪— 清水陽子 2008年  
 No.129 ポリショイ・バレエ—その伝統と日本人ソリスト岩田守弘— 北川裕子・北川剛史 2008年  
 No.129 新ロシア経済図説 岡田進 2010年

**それではまた — До встречи!**